林業における労働災害の未然防止について
～現場から学ぶリスクアセスメント～

天竜森林管理署　森林技術指導官　小田嶋信宏

【背景】

森林資源が充実し伐期を迎えるなか、林業の生産現場における労働安全の確保はこれまで以上に重要性を増している状況であるが、林業特有の作業現場の複雑性や担当者の経験不足等により重大災害の発生リスクが高くなっている。生産現場で危険性を低減させる手法としてのリスクアセスメントは、危険を読み、災害の芽（リスク）をつむために効果的であることから、災害に至る危険因子を取り除いて、災害が生じない安全な職場環境にするため、林災防静岡県支部にご協力いただき現場に即したリスクアセスメントの実践を行った。

【リスクアセスメントの必要性】

①リスクアセスメントとは

リスクとは	作業現場の危険性によって生じる、作業者の怪我の「重大さ」と発生する「可能性」のレベル
アセスメントとは	作業現場のリスクを見積り、評価すること

②参加者

○ 必ず参加　△ 必要に応じて参加

	リスクの特定	リスクの見積	措置の検討	措置の決定
チームリーダー	○	○	○	○
チームメンバー	○	○	○	○
プランナー	○	○	○	○
経営管理者	△	△	△	○

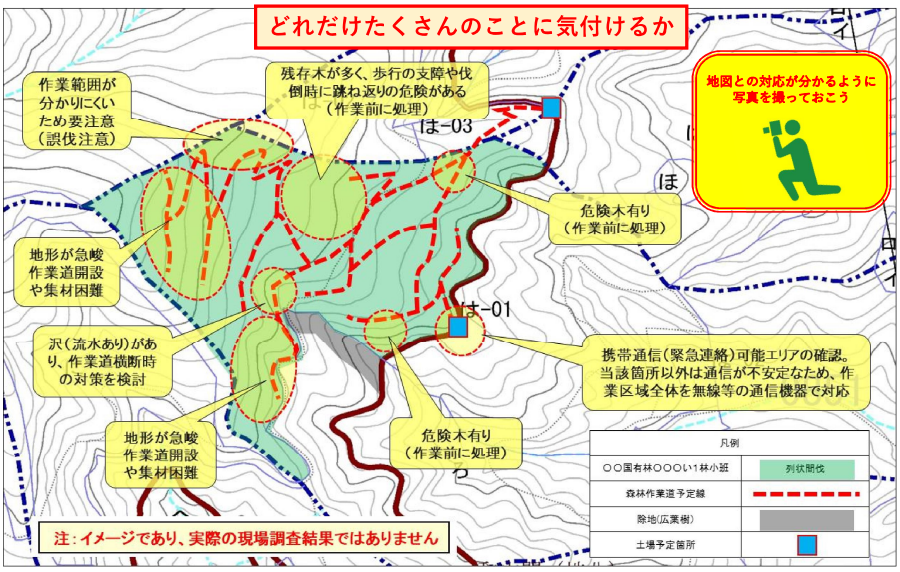
③期待される効果

- 作業現場のリスクが明確になる
- リスクを感じる力が養われる
- 安全対策の優先順位が決定出来る
- 属人的な安全対策からチームワークによる安全確保となる
- 残留リスクに対して、「守るべき決め事」の理由が明確になる

皆で見て、話し合って決めて情報を共有する

【リスクアセスメント実習】

作業範囲 ｜ 地形 ｜ 地質 ｜ 植生 ｜ 沢 ｜ 水源 ｜ 障害物 ｜ 立木状況 ｜ 作業基準 ｜ アクセス ｜ 携帯電波 ｜ 緊急時対応



○リスク評価～現在と対策後

①

危険状態が発生する頻度	
頻繁	4点
ときどき	2点
めったにない	1点

②

危険状態が発生した時にケガに至る可能性	
確実である	6点
可能性が高い	4点
可能性がある	2点
ほとんどない	1点

③

重大なケガの起こる可能性	
確実である	10点
可能性が高い	6点
可能性がある	3点
ほとんどない	1点

④　⑤

総点数	リスクレベル	作業の可否
24～240	Ⅲ	作業不可 速やかにリスク低減措置を講じる
4～23	Ⅱ	リスク低減措置を講じながらの作業可
1～3	Ⅰ	作業可

④総（リスク）数　＝　①頻度　×　②ケガに至る可能性　×　③重大なケガの可能性

○リスクアセスメント見積・評価シート

①現地踏査（危険因子の洗い出し及び作業計画に反映）

②現地の整理及びリスク評価

③各グループにおける現地踏査結果

【リスクアセスメントによる作業条件の改善】

①手順

- 危険性の洗い出し
- リスクの見積
- リスクの優先度の決定
- リスク低減措置の検討、決定
- リスク低減措置の実行

②優先順位

③要件

NGワード
- 注意する、気を付ける、意識する

明確化
- 現地で危険因子を見える化する

技能訓練
- 訓練方法
- マニュアル

作業基準
- ルール（安全用具の使用、合図）
- 規格（伐採、作業道、機資材）

④生かせる情報を積極的に取得する

情報の収集と周知

- ヒヤリハット事例
- 労働災害事例
- パトロールで指摘された事例
- 作業者の不安
- 機械の整備状況

【リスクアセスメントと危険予知活動の違い】

①目的の違い

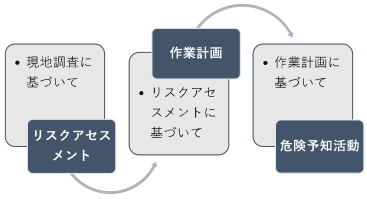
リスクアセスメントの目的

- 作業現場の作業条件と作業方法を改善し、作業の安全性を向上する

危険予知活動の目的

- 本日の作業の危険性を共有し、作業者各自の行動を確認する

②リスクアセスメントと危険予知活動の関係



③比較

	リスクアセスメント	危険予知活動
いつ	作業計画作成前 作業方法変更前 設備の更新、新設時 定期的（1ヶ月、3ヶ月毎）	毎日作業前
メンバー	経営者 プランナー チームリーダー チームメンバー	チームリーダー チームメンバー
何を	作業現場の作業条件を改善する ・作業範囲 ・作業方法 ・人と機械の配置 ・機械、設備の更新、新設、改良 ・作業ルール ・緊急時の対策	本日の作業の危険性と対策を確認する
どのように	作業現場を確認し、作業計画を考慮してリスクアセスメント責任者を中心に時間をかけて検討し対策を実行する	本日の作業手順に従ってチームリーダーを中心に作業前の短い時間で確認する

【まとめ】

山を実際に歩くことで多くのリスクが潜んでいることが実感できた。現場ごとに条件が様々であり、現場ごとのリスクアセスメントが重要ということが理解できた等の意見が参加者から寄せられた。今後、各林業事業体内で安全対策の情報共有やリスクアセスメントの徹底により、職場全体の危険に対する意識向上を高めて無災害の輪を広げていくことを目標に、引き続き実践的な取組を進めていく。